様式2

令和5年度　清瀬市立清瀬第四小学校　学校評価表

学校教育目標

◆すなおな明るい元気な子　◆よく考えやりぬく子
◆なかよく力をあわせる子　◆自然に親しむ子

目指す学校像(ビジョン)

【目指す学校像】	◆わくわく感のある学校　◆安心感のある学校　◆達成感のある学校
【目指す児童像】	◆よく聞き、よく考え、よく話し・よく書く児童　◆あいさつ・返事・言葉づかい・整理整頓ができる児童　◆仲間を励ます児童
【目指す教師像】	◆いじめに敏感な教師　◆児童の思いや願いを引き出せる教師 ◆保護者の思いを受け止める教師　◆最後まで見届け、励ます教師

育成を目指す資質・能力及び特色ある教育活動

1【言語力を伸ばすための言語活動の充実】読書活動を土台とし、児童の主体性を引き出す「言語活動」を意図的計画的にに実施し、授業での見取り、評価を通して言語力を伸ばす。
2【算数の学力向上、基礎・基本の徹底】「東京ベーシック・ドリル」を積極的に活用した指導の充実を図るとともに、個の課題に応じた宿題の設定等により基礎・基本の確実な定着を図る。
3【日常的・継続的取組による体力・運動能力の向上】体育の授業を改善・充実(運動量20分の確保)するとともに、中休みや昼休みを活用して運動遊びの日常化を推進し、児童の体力向上を図る。
4【児童理解の充実と生活指導・学級経営の充実】年3回の「アセス(学校環境適応尺度)」(4年～)により児童個人及び学級の状態・変容を捉えるとともに、「心と体のアンケート」(3年～)を実施し、それらの結果を生かした生活指導及び学級経営を推進する。

前年度までの学校経営上の成果と課題

柱	具体的方策	自己評価 評価 取組指標	自己評価 評価 成果指標	自己評価 成果・課題及び次年度以降の改善方策(案)	学校関係者評価 学校関係者による「自己評価」についての評価	次年度以降の改善方策 学校関係者評価の結果を踏まえた改善方策
確かな学力の向上	児童全員が各学年の国語教科書をすらすらと音読したり、東京ベーシックドリルの活用を図ったりする。	4.0	3.0	俳句や詩の暗唱などの音読の課題を定期的に児童に提示し、前向きに取り組む児童が増えている。次年度も取組を継続し、言語力の強化を図る。また、東京ベーシックドリルを活用し、児童の学力の状況を把握し、指導に生かしていく。	暗唱は脳の記憶力を育てると言われており、様々な言語に触れて語彙力も増えるものである。次年度も指導を継続してほしい。また、国語に対する「好きではない」を改善するためのコミュニケーションを図りながらの指導も必要だと考える。	○クラスごとに取り組みの軽重があったもののが、全体的には、取り組んだ分だけ、その効果が見えてきた。 □家庭学習とも関連づけながら、児童の「もっとやりたい！」と引き出しながら行い、「できた！」という達成感を味わえるよう、全校での取り組みも工夫していく。
	読書貯金シートの記録や詩や俳句暗唱、スピーチ、漢字習得・活用等の活動を実施する。	4.0	2.8	読書貯金シートに読書記録を通年で記入したり、定期的に実施する読書週間で様々な工夫を行ったりすることで、読書への意欲喚起を行う。清四漢検やスピーチにも継続して取り組み、言語力を身に付けさせていく。	読書を指導するためには、図書館等で気軽に本に触れたり、家庭で親子一緒に本を読む時間を作るような環境づくりも必要だと考える。学校で行える活動には限界があると思うが、活動の詳細や様子を家庭へもう少しフィードバックできるとよい。	○一人1万ページを目標に読書に取り組ませ、6割ほどの児童が達成できた。家庭学習「親子読書タイム」のような時間がつくれたら、本の世界もさらに広がると感じる。 □読書の機会を全校として更に増やせるように、全校での取り組みと国語授業の中でも工夫していく。清四漢検をさらに改良を図ったり、音読・暗唱ができたりす
豊かな心の育成	にこにこ班（縦割り班）活動を生かしたボランティア活動を実施する。	4.0	3.2	にこにこ班活動を通して異学年集団での取組を行ってきた。次年度も、月に1回「にこにこ班遊び」を実施することや、全校遠足や6年生を送る会などの行事において、異学年交流をしたり、あいさつ隊の取組を通して、さらに豊かな心を育成していく。	異学年交流をしていくことで、低学年は自然と高学年を見本とする。そのことによって、高学年は責任感が育まれる。小規模校の良さをいかし、心を育ててほしい。	○縦割り班活動にこにこ班は、上学年がお手本の姿を示し、下学年が見習い行動していくという姿が見えたきた。 □毎朝のあいさつ隊の活動は、お客さんではなく自分から挨拶する責任感も育まれている。にこにこ班の仲間でがんばるという思いをさらに高めていく。あいさつ隊が終わったら、感想を述べて、全校朝会で発表する場の工夫をする。
	こころのアンケートを２か月に１回行い、丁寧な聞き取りを実施し、学校が楽しいという児童を増やす。	4.0	3.8	毎回のアンケートで各学級1～2件程度の記入があり、丁寧な聞き取りを行い、即時対応を心掛けてきた。児童は些細なことでもアンケートに記入するようになっている。軽微ないじめも見逃さないよう、次年度も継続して行っていく。	定期的にアンケートを実施することで、相談しやすい環境になっている。アンケートだけではなく、普段からのコミュニケーションも大事なので、これからも子どもたちのサインを見落とすことなく、対応していただきたい。	○いじめの問題は、いつどこで起こるかわからない。油断せずに、今後もこのシステムと体制で早期対応、早期収束し、引きずらない指導を行う。 □奇数月にアンケート実施をしつつ、軽微ないじめも含め、その数字が減っていくことをバロメーターにして進めていく。
健やかな体の育成	体育授業での運動量20分間以上を確保するとともに、マッスルデーや体育集会で持久力や俊敏性を高める。	3.4	4.0	各学級において、体育授業での運動量確保を心掛けるとともに、外遊びを励行してきた。また、持久力や俊敏性を高めるために、体育集会で長縄跳びに取り組んできた。今年度月に1回実施してきたマッスルデーを、次年度は毎月3回程度に増やし、さらなる体力向上を図る。	身体を思い切り動かすことは、健やかな心身の成長に欠かせないものと考える。運動が得意でない児童でもみんなで一緒に長縄に挑戦するなどはよい取組だと思う。持久力や俊敏性を高めるとともに、大谷選手のグローブをきっかけに遠投などの機能の向上が図れればよい。	○体力調査の結果を踏まえ、特に数値の凹みのある「持久力」について、今年度は具体策が実施できなかった。 □マッスルデーを拡充し、全校で取り組む時間を確保して、着実に推進していく。さしあたり、「週時程」を工夫して実施していく。
	食育を推進し、自分がもらった給食を粘り強く残さず食べる児童を育てる。 朝食を食べる児童を育てる。	3.4	3.0	低学年児童はほぼ全員が朝ご飯をきちんと食べている。高学年になるほど食べない児童も増える。給食では、季節の食材や郷土料理等をその都度紹介している。今後も、食についての関心を高めていく取組を継続し、好き嫌いを減らし、給食を残さず食べる児童を育てていく。	魚料理や家庭で取扱いの少ない食材を学校給食で取り入れて、児童の口に入れてほしいと思う。給食はアレルギーの問題もあり先生方の配慮は大変だと思うが、児童が食についての関心を高められるように指導をお願いしたい。また、朝食を摂る大切さを児童だけでなく保護者にも知ってほしい。	○自分の分は、各担任の指導・支援によって、残さず食べよう、自分がもらったら食べ切ろうという意識は高まってきた。 □今後も注意深く児童理解を深めながら、個に応じた支援を丁寧に続ける。また家庭での「食育」の意識向上、特に朝食は何か必ず食べてくることを奨励していく。
特別支援教育の充実	各教室で、「指導のユニバーサルデザイン化チェックリスト」１５の実践を学期ごとに自己評価していく。	3.4	3.0	チェックリストを活用することで、全教員が意識的にユニバーサルデザインの視点を取り入れた学習環境の工夫や授業改善に取り組み、自己評価を行ってきた。次年度もチェックリストの活用を推進していく。	四小独自のチェックリストがあることで、指標がはっきりするとともに、先生方の意識向上につながっていてとても良いことだと思う。	○チェックリストで確認することは、定期的にできるようになってきた。しかし気を抜くと疎かになりがちでもある。 □担当教員を中心に、時には相互チェック体制を検討する。児童の実態に応じて「何を大事にしたのか」「どんな成果があったのか」を明確にしていく。
	ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の向上を図る。全教員が研究授業を１回以上行う。	2.0	4.0	「焦点化」「視覚化」「共有化」を明確にし、すべての児童にとって分かりやすい、学びやすい授業づくりに努めてきた。次年度も、全教員が年1回以上の研究授業を行い、指導力のさらなる向上に努めていく。	研究授業を実施することにより、先生方の「気づき」が早くなり、授業の精度を上げていくことに繋がると考える。次年度も工夫した授業づくりを期待する。	○この項目の「保護者アンケート」の数値が73％と低めだった。どのような配慮をして授業をしているのか、環境を整えているのかを分かりやすく発信する必要がある。 □月に1回程度、授業実践について発信し、そのポイントを提示し、授業参観でも同じ視点をもってもらう。
本校の特色	近隣の自然（せせらぎ公園等）を積極的に活用して体験活動及び栽培活動を行う。	1.0	3.5	ゲストティーチャーを積極的に活用し、自然体験活動や栽培・観察活動を行った。次年度も自然環境豊かな本校の特色を生かした活動を継続して行っていく。	四小周辺の環境は宝である。四小ならではの特色ある活動であるため、地域の協力も得ながら、継続してほしい。	○生活科、理科、総合的な学習において、周辺の自然の活用の仕方を、一度立ち止まって精査しなければならない。 □月ごと計画と実施を記録し、1年間の取り組みを振り返るようにしていく。一部の職員だけに頼らないようにする。
	各学年において、学校支援本部への依頼と協力によって円滑に教育活動が進むこと。	4.0	3.0	体育発表会や音楽会などの行事での受付業務や漢検実施のスタッフなど、学校支援本部の方々と多くの場面で協力して教育活動を推進することができた。次年度もより一層の協力体制を構築していく。	学校支援本部とよく連携をとり、強固な体制づくりに努めてほしい。	○今年度は、特に「清四漢検」の実施が大きな取り組みであった。ここは継続していく。 □各学年の取組において、今年度依頼したことを一覧に整理して、来年度の活性化につなげる。